

江戸川大学・江戸川短期大学
学 報

授業実施についての
教員による自己評価
結果報告書

・

第 10 卒業者に対する
自己評価サーベイ結果報告書

・

パイロット・スタディ総括報告書

平成 15 年 6 月

江戸川大学
自己点検委員会

目 次

授業実施についての教員による自己評価結果報告書

1. 平成14年度・後期授業評価の目的と手順	3
2. 結果の概要	3
2.1 単純集計結果	3
2.2 回答間の関連についての考察	4
2.2.1 再カテゴリ化項目とそれらの間の関連	4
2.2.2 授業形態別にみた授業のあり方	4
2.2.3 2群の平均値の差の検定による特徴把握	6
2.2.4 数値項目の上下端に見られる特徴	7
3. 考察	8

第10卒業生に対する自己評価サーベイ結果報告書

1. 平成15年3月卒業生に対するアンケートの目的と手順	9
2. 結果の概要	9
2.1 回答者の成績関連データと属性	9
2.2 学生生活についての学生の自己評価	10
2.3 属性項目間の関連	11
2.4 ステートメントへの回答の属性別の特徴	11
2.4.1 性別の特徴	12
2.4.2 学科別の特徴	12
2.4.3 入試種別の特徴	12
2.4.4 nap5 段階別の特徴	13
2.4.5 卒業後進路別特徴	13
2.4.6 自己評価3段階別の特徴	13
3. まとめと提言	14

パイロット・スタディ総括報告書

1. 点検基準とパイロット・スタディ	15
2. パイロット・スタディを通じてのいくつかの提言	15
2.1 教員による自己評価について	15
2.2 卒業時学生に対するサーベイについて	16

授業実施についての教員による自己評価結果報告書

1.平成14年度・後期授業評価の目的と手順

この報告書は同名のタイトルの前期報告書に続き、年度後期に専任教員が担当し、学生に対する評価を行った授業科目(コマ)について、担当教員による自己評価を求めた結果を報告するものである。このため目的等については重複を避け省く。

この期に専任教員により開講した316コマに対して227票の回答が寄せられ、単純な回答比率は71.8%である。しかし回答内容は必ずしもコマと1対1に対応せず、一部に複数コマに対する一括回答や複数担当教員による個別の回答などを含むため、この数字は概数である。この期に専任以外の教員による開講コマ数は99コマであり、総開講コマ数415に対しては54.7%となっている。

これを教員数ベースで見ると専任教員の84.2%が回答を寄せており、9名からは回答が得られなかった。

後期開講コマには前期と異なり、ゼミ、演習・実習などの通年科目が含まれているため、結果を単純に比較することは妥当でないため、この報告書では主に後期分について扱うこととする。

2.結果の概要

2.1 単純集計結果

評価票のうち数値項目に対する単純集計結果を前期同様付録Aとして巻末に添付した。

科目属性では3群科目が48.5%を占めており、前期とは異なる。授業形態では講義は38.8%と前期より少なく、それ以外の小人数による授業が6割を占めている。また46.1%の科目が必修で前期より大幅に多い。このほか学科指定のある科目が3分の2、学年指定が3年以上である科目がほぼ4割である。

受講登録者数は1~435人で平均48.5人、標準偏差65.4と前期より少ない。

教員が単独で担当する科目は94.2%である。

試験を除く後期の授業の実施回数は10~14回以上だが、14回以上が45.0%である(但し、これはカテゴリ設定が半期を想定しているためであり、通年科目についてはより多い実施回数となるのは当然である)。

学生の平均的な出席率(概算)は70%以下が49.3%、70~80%は34.2%、80%を超えるものは34.7%であり、前期より高い。毎回出席をとった科目は78.0%である。出席チェックの方法としては「名簿読み上げ」33.5%、「授業内レポート提出」26.4%、「カードレコーダー使用」12.3%などのほか、小人数なので顔を見て確認するなどの「その他」回答が多かった。

授業のスタイルを自由記述で尋ねた結果は付録Bとして添付した。

教材などで利用したものとしては「プリント配布」71.5%、「板書」60.5%、「パソコン利用」40.8%、「スライド・ビデオなど」39.9%、「テキストを指定」39.0%などが主で複数の媒体が利用されている(件数計281.6%)。

学生の達成度、成績評価のために利用したものとしては「出席回数」59.6%、「レポート提出」49.1%、「受講態度」36.9%、「授業内レポート」35.0%などが主で、これも複数のデータを利用している(件数計250.0%)。

学生とのコミュニケーションに利用したものとしては「対話」71.5%、「質疑応答」71.1%、「授業内レポート」34.6%などとなっている。

今期の授業運営についての5段階評価による15項目で合意率(あてはまる+ややあてはまるの比率)の高いのは「授業内容は学生にとって役立つと思う」82.3%、「予定した授業内容をこなせた」12.9%、「この授業を行うのは楽しかった」72.5%などであり、低いのは「学生の私語が多かった」15.7%、「指定したテキストを買わない学生がいた」17.1%などである。

今期の授業を100点満点で採点した結果は50~100点、平均77.8点、標準偏差9.3である。

担当授業についての独自の工夫、問題点・要改善点、希望するサポート等についての自由記述での回答を求めた結果は付録Cとして添付した。

2.2 回答間の関連についての考察

ここでの考察は概ね前期報告書の方式に従うこととするが、後期科目にはゼミ、演習形式の小人数の授業が多いため、その特徴が反映されている。

2.2.1 再カテゴリ化項目とそれらの間の関連

再カテゴリ化された項目相互間には次のような有意な関連が見られた。

表1 再カテゴリ化された項目とその間の関連

項目	再カテゴリ後の定義		優位な関連のある他の項目
	群1	群2	
群	1～2群	3群	出席率
授業形態	講義	その他	登録者数
出席率	～79%	それ以上	登録者数
登録者	～69人	それ以上	出席率
自己評価点	～79点	それ以上	出席率

このほか登録者数を3区分(～15、16～69、70～)した場合に出席率との関連が見られる。

ここで出席率のよい科目は3群、講義以外の科目、登録者数の少ない科目である。

2.2.2 授業形態別にみた授業のあり方

以下に授業形態別にみた「出席チェックの方法」「利用教材」「達成度評価に利用したもの」「学生とのコミュニケーションに利用したもの」などの結果を掲げる。

表2.1 出席チェックの方法・授業形態別(複数回答)

カテゴリ	全体	授業形態別	
		講義	その他
総数	228	88	140
名簿読み上げ	33.3	12.5	46.4
授業内レポートの提出	26.3	48.9	12.1
出席簿回覧	2.6	2.6	-
座席表回覧	0.3	0.4	-
カードレコーダー	12.3	30.7	0.7
その他	27.6	18.2	33.6

表2.2 利用教材・授業形態別(複数回答)

カテゴリ	全体	授業形態別	
		講義	その他
テキストを指定	39.0	34.1	42.1
プリント配布	71.5	77.3	67.9
板書	60.5	68.2	55.7
OHP・OHC	18.9	27.3	13.6
スライド・ビデオなど	39.9	59.1	27.9
パソコン利用	40.8	31.8	46.4
その他	11.0	6.8	13.6

表2.3 成績評価に利用したもの・授業形態別 (複数回答)

カテゴリ	全体	授業形態別	
		講義	その他
レポート提出	49.1	46.6	50.7
ノート提出	0.2	0.2	0.1
随時の試験	7.9	10.2	6.4
定期試験	31.6	53.4	17.9
出席回数	59.6	60.2	63.6
受講態度	36.0	23.9	43.6
授業内レポート	35.1	52.3	24.3
その他の自主課題	28.9	13.6	38.6

表2.4 学生とのコミュニケーションに利用したもの
・授業形態別 (複数回答)

カテゴリ	全体	授業形態別	
		講義	その他
対話	71.5	48.9	85.7
質疑応答	71.0	60.2	77.9
授業内レポート	34.6	46.6	27.1
その他	18.0	18.2	17.9

これらにより授業形態によって授業のあり方に差があることが分かる。

2.2.3 2群の平均値の差の検定による特徴把握

後期授業運営の実績評価項目について、便宜的なウェイトを与えた平均値について、再カテゴリー化した2群間での比較を行った結果を表3に示した。

表3 運営実績評価と基本属性との関連

	分割基準		平均値に差のある項目	平均値		p	
				群1	群2		
科目群別	1、2群	3群	ノートをとらない学生あり	2.940	3.417	0.0087	
			多量の板書が必要だった	2.983	3.822	0.0000	
			学生の欠席が多かった	2.948	3.551	0.0009	
			学生の遅刻が多かった	3.284	3.907	0.0003	
			学生の私語が多かった	3.687	4.262	0.0011	
			テキストを買わない学生	3.556	4.409	0.0000	
			学生の質がばらばらだった	2.578	3.103	0.0040	
			授業形態別	講義	その他	授業内容は学生に役立つ	2.080
ノートをとらない学生あり	2.908	3.331				0.0180	
多量の板書が必要だった	3.092	3.584				0.0080	
学生の欠席が多かった	2.966	3.426				0.0097	
テキストを買わない学生	3.643	4.163				0.0117	
出席率	~79	80~				授業内容は学生に役立つ	1.982
			受講態度はまじめだった	2.336	1.772	0.0001	
			ノートをとらない学生あり	2.907	3.423	0.0045	
			学生の欠席が多かった	2.651	3.805	0.0000	
			学生の遅刻が多かった	3.138	4.009	0.0000	
			学生の私語が多かった	3.778	4.133	0.0471	
			学生の質がばらばらだった	2.536	3.134	0.0010	
			登録者数	~69	70~	授業内容は学生に役立つ	1.740
受講態度はまじめだった	1.960	2.400				0.0132	
ノートをとらない学生あり	3.298	2.578				0.0013	
多量の板書が必要だった	3.512	2.956				0.0177	
学生の欠席が多かった	3.374	2.733				0.0045	
学生の遅刻が多かった	3.702	3.089				0.0042	
学生の私語が多かった	4.111	3.341				0.0005	
テキストを買わない学生	4.065	3.455				0.0221	
学生の質がばらばら	2.963	2.227		0.0015			
	~15	16~		授業内容は学生に役立つ	1.680	1.983	0.0317
				学生の遅刻が多かった	3.880	2.983	0.0000
				学生の欠席が多かった	3.515	3.009	0.0060
				ノートをとらない学生あり	3.919	3.282	0.0002
				学生の私語が多かった	4.343	3.621	0.0000
				学生の質がばらばらだった	3.040	2.607	0.0199

* 欠席、遅刻、私語等の項目では他の項目とは異なり平均点が低い場合に「評価が高い」関係にあることに注意。

** このほか「自己評価点2区分」では「多量の板書が必要だった」以外の全ての項目について自己評価の高い群が、これらの授業運営の実績にも高い評価を与えている。

これらの特徴を要約すると、1~2群、講義科目、出席率の低い科目、登録者数の多い科目での実績評価が概して低いことが分かる

2.2.4 数値項目の上下端に見られる特徴

ここまでに受講登録者数の多い科目に対する教員による自己評価が低い傾向にあることから、登録者数が150人以上の科目を列举すると表4となる。

表4 受講登録者数が極端に多い科目

科目名	登録者数	群	学年配当	特性	曜日・時限	評価
民俗学2	200	2	1	選択	火1	8.0
コミュニケーションと文化2	238	2	1	選択必修	火2	7.5
メディア産業論2	400	2	2	選択	月2	7.5
マスコミ史2	200	2	2	選択	月3	7.0
広告論2	202	2	2	選択	木2	7.5
科学概論2	218	1	2	選択	木1	7.0
社会心理学	181	1	2	選択	金1	7.0
日本国憲法2	197	1	1	選択	水1	7.0
経済関係法	217	2	3	選択	水2	6.5
日本国憲法2	283	1	1	選択	金1	6.5
マスメディアの法と倫理	149	2	3	選択	金2	7.5
文化人類学2	435	1	1	選択	月3	8.5
宗教社会学2	163	1	2	選択	金3	8.5
心理学特講	155	2	2	選択	火2	7.0
環境社会学2	276	2	2	選択	月4	NA
余暇開発論2	264	2	2	選択	月3	NA

受講登録者数の少ない科目は前期と異なりゼミ、演習・実習等で多数あるため、個別には列举しないこととする。

また後期で自己評価点の特に高い科目と特に低い科目を表6に示した。

表6 教員による自己評価点の高い科目、低い科目

科目名	登録者数	群	学年配当	特性	曜日・時限	評価
マスコミ演習・実習	37	3	3	必修	金3・4	10.0
社会体験演習	8	1	3	選択	-	9.5
卒業研究	15	3	4	必修	-	9.5
専門ゼミ	-	3	3	必修	木3	9.5
専門ゼミ	10	3	3	必修	火3	9.5
ビジネス英語2	38	2	3	選択	木4	9.5
新聞学各論	65	-	3	選択	木1	9.8
マスコミ演習・実習	70	3	3	必修	金3・4	9.5
パシフィックカルチャー2	110	1	2	選択	火5	9.5
地域活性化論	97	2	1	選択	木2	5.0
卒業研究	7	3	4	必修	木1	5.0
基礎ゼミ	11	3	1	必修	木5	5.0
基礎ゼミ	12	3	1	必修	木5	5.0

3. 考察

平成14年度後期の教員による授業実施の自己評価を前期とほぼ同様の要領でまとめてみた。後期授業にはゼミ、卒業研究、演習・実習など通年の小人数科目が含まれるため、数値項目の前期との単純な比較には無理があるが、大規模講義科目の問題点がかなりはっきり浮かび上がったかと思う。

この種のデータ収集を今後どのように進めるべきかについては「パイロット・サーベイ総括報告」としてまとめるが、教員による自己評価はとりあえず毎年実施とはしない予定である。関係者のご協力に感謝したい。

第10 卒業生に対する自己評価サーベイ結果報告書

1. 平成15年3月卒業生に対するアンケートの目的と手順

本学では今年3月に第10回の卒業生を送り出した。卒業生がどのように学生生活を送り、どんな自覚を持って社会に巣立つのかについてのデータはこれまでとられたことがなかった。いわば「完成品」の品質は未知であった。本委員会では今年度初めての試みとして彼等がどのように学生生活を送り、どのような自覚のもとに社会に巣立つのかについてのパイロット・スタディを行った。

アンケートは平成15年3月15日の第10回卒業式に参集した卒業生に対して式の開始前にアンケート用紙を配布し、記入・回収した。その結果383名の卒業生のうち356名分を回収したが、このうち80票は無記名であった。学科別の記名回収内訳は表1のとおりである。

表1 回収結果

学科	卒業学生数	回収数	回収率
人間社会	139	95	68.3%
マス・コミ	156	114	73.0
環境情報	86	67	77.9
小計	383	276	72.1
無記名	-	80	-
計	383	356	93.0

記入内容を概観したところ、無記名による回答傾向は記名のものと異なり、その信憑性にはやや疑義があるうえ、学務データとのマッチングによる分析ができないため、これらを除外し、記名回答のみを分析対象とすることとした。

2. 結果の概要

2.1 回答者の成績関連データと属性

今回記名回答した276名の卒業生については、学務データからそのプロフィールを探ることができる。以下ではそれを概観する。

まず、回答者たちは平均137単位を取得して卒業することになった(最小128、最大176単位、標準偏差8.209)。

在学中に履修登録した科目数は平均9.6科目(最小3.6、最大17.8、標準偏差21.812)である。但し、これは3年次編入生を含んだ数字であり、4年間、またはそれ以上在学した学生についての最小値は6.4科目である。

これに対して単位を取得した科目数は平均7.2科目(最小3.0、最大9.4、標準偏差6.894)であり、4年間、またはそれ以上在学した学生についての最小は6.4科目である。

登録科目数に対する単位取得科目数の比率は平均77%(最小39、最大100、標準偏差14.7)である。今期卒業生についてはキャップ制は適用されていないため、一部の学生による履修の途中放棄やカラ登録の多発の影響が見られる。一人当たりの平均では優3.6科目、良2.3科目、可1.3科目、不可2.5科目の成績で卒業したことになる。但し、この数字のうち優、不可については標準偏差が大きく個人差が大きいことがわかる(標準偏差:優14.789、良7.135、可7.978、不可21.248)。

これらの素材から、成績評価の優、良、可、不可にそれぞれ3、2、1、0の値を与えた個人ごとの累計を登録科目数で割ったgpaを計算すると、平均1.821(最小0.660、最大2.960、標準偏差0.523)となるが、上にみたようにカラ登録の多い状況では、この値は成績評価を過度に低く評価することになり、実態にそぐわない面がある。

そこで累計を成績不可の科目を除いた単位取得科目数で割り、これを仮にnpa(netpoint average)と呼ぶことにすると、その平均は2.327(最小1.520、最大2.960、標準偏差0.2907)となり、gpaよりは違和感は少なくなる。これら2つの指標間の相関は0.8787と有意である。

なお累計をそのまま属性として利用すると3年次編入生の成績を過度に低く評価することとなるため、今後の分析では単位取得科目当りの平均であるnpaを使うこととする。

以上は学務データからみた回答者の特徴であるが、アンケート項目に即した特徴の主なものは、男65.2%、女34.8%。進路では就職が決まっているもの59.8%。入学時の入試種別では推薦42.2%、一般38.4%などである。

2.2 学生生活についての学生の自己評価

このアンケートでは卒業時の学生の状況を知り、あわせて彼等の価値観や価値体系を推量するための基礎データの収集のために、彼等の行動、興味、意見についての46項目のステートメントを設定し、それらに対する5件法による評定反応を得ることとした。パイロット・スタディの性質上、ステートメントの設定は任意に行ったが、学生生活の重要な側面はできるだけ網羅するようにした。並列した46項目の態度、意見、行動についての回答結果をそれぞれのステートメントに対する同意率(「そう思う」+「ややそう思う」の比率)および同意指標(同意率から「ややそうは思わない」+「そうは思わない」を差し引いた比率)によって整理し、同意率が高い順に表2に示した。同意率は直感的理解がしやすいが、時系列比較には同意指標のほうが安定性を見込めるため併記したものである。

表2 同意率から見た回答結果

項目	ステートメント	同意率	同意指標
2j	よい友人ができた	83.7	75.7
2d	NZ研修は有意義だった	68.6	45.3
1f	バイト先で学んだことが多い	68.4	51.1
1c	この4年間はよく遊んだ	63.0	49.5
1t	大学4年間で自分の成長を感じた	62.2	48.4
2o*	大学通学のための家族の経済的負担が大きかった	60.8	43.8
2v	この大学に入ってよかった	59.8	50.4
2w*	マナーの悪い学生が多かった	58.7	47.8
2k	自己表現の能力が上がった	58.0	44.2
1r	大学で学んだことは多かった	56.9	40.9
1i	シラバスを検討して科目を選んだ	55.6	31.6
2s	調べ物や本の借り出しで図書館を利用した	55.1	29.7
1u	大学生活で教養が身についた	54.5	40.0
2t	Webサイトをよく利用した	54.3	27.9
2u	与えられたメールアドレスをよく利用した	52.5	25.0
2g	卒論を書くことで成長した	52.2	31.5
2p*	バイトの収入は遊ぶためのお金になった	51.3	28.5
1o*	専門書はほとんど読まなかった	47.3	18.9
2e	パソコンを自由に使いこなせるようになった	44.6	24.6
1v	江戸川大学の卒業生としての誇りを持っている	44.5	21.5
1h*	単位のとりやすい科目を選んで履修した	43.6	13.8
1g*	成績のよしあしは気にしなかった	42.4	6.5
1d*	この4年間はバイトで忙しかった	42.3	13.5
1l*	高校までの勉強が足りなかった	41.6	9.4
1p	専門分野についての素養が身についた	38.8	13.0
1s	大学生活で自分の独善性に気が付いた	38.3	21.3
1a	大学生活の4年間にはよく勉強した	38.1	2.2
2q*	通学時間の長さや混雑が負担だった	35.3	-11.6
2l	希望した職種に就職できた	34.7	-11.3
1p	卒業して自信を持って社会に出ていける	34.1	13.0

2 m	希望した業界・職種に就職できた	31.4	-16.8
1 h	授業中に私語を注意されたことがある	31.2	-16.8
1 w *	授業に出席せずにレポートを提出したり試験を受けた	31.0	-21.2

1 k *	必修科目の単位取得がなかった	26.8	-22.1
1 e *	バイトの都合に合わせて時間割りを組んだ	25.0	-32.2
1 b	この4年間は部活、クラブ中心の生活だった	23.3	-45.8
2 i	スポーツの技量が上がった	22.0	-39.6
2 n *	就職先にあまり明るい希望を持ってない	20.6	-25.0

2 f	英語の力がついた	18.8	-34.1
1 j	履修モデルを参考にして科目を選んだ	16.0	-44.0
2 r *	健康状態が優れなかった	14.1	-46.4
1 n *	難しい授業が多かった	11.2	-35.5
2 b *	教員とのトラブルが多かった	10.5	-71.4
2 a *	他の学生とのトラブルが多かった	9.6	-74.2
2 c *	職員とのトラブルが多かった	9.4	-70.5
1 m	厳しい先生が多かった	8.4	-46.9

注) *を付けた項目はこの大学での教育目的にとってマイナスと考えられるものである。
無印はプラスと考えられる項目と、両義的な項目を含んでいる。

表2に見られる特徴としては、プラスイメージの項目が概して同意率が高く、上位にあるのに対して、マイナスイメージの項目への同意率は低い。しかし、この傾向にも例外があり、学生の「遊び」志向が高く、「学び」への志向の低さも見られる。こうした志向にはかなりの個人差があるのだが、単純集計結果はそれらの混合状態を表したものとみることができよう。

2.3 属性項目間の関連

属性による回答の差をみる前に、回答実数を考慮して以下のように項目を整理し、それらの間の関係を見ることとする。

回答者の属性としては性別、卒業後の進路(2区分)、入試種別(2区分)、学科別のほか、自己評点別(3fを3区分)、gpa(5区分)、npa(5区分)等を設定することができる。これらの属性間のクロス表の検定結果から、表3のような特徴を見ることができる。

表3 属性項目間の関連

	性	gpa5	学科	入試区分	npa5
gpa5段階	.45221				
学科	.17884	.24269			
npa5段階	.50894	.52817	.20126		
科目取得率5段階	.36425	.67387	.25306	.19195	.26608

注)表中の数値は項目間クロス表の χ^2 検定結果が $p<0.05$ のものについてのクラメールの連関係数である。

要約すると属性間での関連では学生の性別やgpa5段階区分、科目取得率などの間の関連が強い。また科目取得率との関連では性別で女、入試区分で推薦の取得率が高い。学科別では人間社会で取得率が目だって低いグループがある。

2.4 ステートメントへの回答の属性別の特徴

ステートメントへの回答には属性による傾向に差があるので、性別、学科別、入試種別、npa5段階別、進路別、自己評価別の検定有意な特徴の要点を示すこととする。

2.4.1 性別の特徴

回答の性別特徴を表4に示した。プラスイメージは男子より女子学生に多いことが分かる。

表4 ステートメントへの回答の性別の特徴

項目	計	同意率	
		男	女
1 h * 単位のとりのやすい科目を選んで履修した	43.6	50.0	31.6
1 i シラバスを検討して科目を選んだ	55.6	50.6	65.3
1 k * 必修科目の単位取得がなかった	26.8	33.3	14.6
1 p 専門分野についての素養が身についた	38.8	36.1	43.8
1 r この大学で学んだことは多かった	56.9	51.7	65.7
2 i スポーツの技量が上がった	22.0	25.5	15.6
2 v この大学に入ってよかった	59.8	55.0	68.7

注) 計に掲げた比率は関連属性と当該項目の両者に回答のあったケースをペアワイズに処理して得られたものである。このため単純集計結果とは厳密には一致しない場合がある。この事情は以下の表でも同様である。

2.4.2 学科別の特徴

学科別には次のような特徴が見られる。

表4 学科別特徴

項目	計	同意率		
		人社	マス	環情
1 a 大学生活の4年間にはよく勉強した	38.1	32.9	40.7	44.0
1 b この4年間は部活・クラブ中心の生活だった	23.3	18.9	28.4	20.9
2 d NZ研修は有意義だった	68.6	80.5	81.4	26.7

なお、NZ、オーストラリア研修は人社、マスは必修、環情は選択科目である。

2.4.3 入試種別の特徴

入試種別の回答特徴は表5のとおりである。

表5 入試種別の特徴

項目	計	同意率	
		推薦	その他
1 c この4年間はよく遊んだ	63.4	59.3	66.5
1 k * 必修科目の単位取得がなかった	25.8	20.3	29.7
1 i * 高校までの勉強が足りなかった	41.4	39.8	42.6
1 r 大学で学んだことは多かった	57.9	56.6	57.7
(非同意率)	16.1	16.8	15.5)
2 f 英語の力がついた	18.7	15.0	21.3
2 i スポーツの技量が上がった	22.7	26.8	19.6
2 o * 大学通学のための家族の負担は大きかった	61.9	64.8	67.1
(どちらとも言えない)	20.9	27.4	16.1)

2.4.4 n p a 5段階別の特徴

学生の n p a 得点を5段階区分した場合の回答の特徴は表6の通りである。5段階区分は第1区分から第5区分に向けて成績評価が高いグループである。

表6 n p a 5段階別の特徴

項目	計	同意率				
		1	2	3	4	5
1 a 大学生生活の4年間にはよく勉強した	38.1	29.4	28.5	27.2	41.7	52.7
1 h * 単位のとりにやすい科目を選んで履修した	43.6	66.1	64.3	45.4	26.8	35.9
1 i シラバスを検討して科目を選んだ	55.6	35.8	46.4	50.9	73.2	70.9
1 k * 必修科目の単位取得がなかった	26.8	45.3	36.9	21.8	17.8	12.8
1 w 授業に出席せずにレポート提出したり 試験を受けた	31.0	49.0	45.6	27.3	20.0	13.0
2 b * 教員とのトラブルが多かった	10.5	11.4	12.3	7.3	10.7	10.7
2 u 与えられたメールアドレスをよく利用した	52.5	37.7	45.6	50.9	58.9	69.0

2.4.5 卒業後の進路別特徴

卒業後の進路別にみた回答の特徴は表7の通りである。

表7 進路別の特徴

項目	計	同意率	
		就職決定	その他
1 f バイト先で学んだことが多い	68.4	73.9	60.3
1 q 卒業して自信を持って社会に出ていける	34.1	39.4	25.8
2 k 自己表現の能力が上がった	58.0	65.3	47.3
2 l 希望した職種に就職できた	34.7	48.5	13.8
2 m 希望した業界・会社に就職できた	31.4	42.7	14.5
2 n 就職先にあまり明るい希望を持ってない	20.6	16.4	27.1
2 r 健康状態が優れなかった	14.1	10.9	18.9

2.4.6 自己評価3段階別の特徴

項目3 fでは「あなたの大学生生活に100点満点で点をつけるとしたら……」と尋ねた結果を3段階に区分して特徴を見たところ表8の結果を得た。ここで段階1は69点未満、段階2は70～89点、段階3は90点以上としており、段階が高い区分は自己評価が高いグループである。この3段階区分は性、学科、入試種別、n p a 5段階、進路等の属性との関連が見られず、以下のような主観評価と強く係わっているものである。

表8 自己評価3段階別の特徴

項目	計	同意率		
		1	2	3
1 a 大学生生活の4年間はよく勉強した	39.5	27.6	38.9	58.5
1 c この4年間はよく遊んだ	62.8	46.1	68.4	87.4
1 d * この4年間はバイトで忙しかった	41.6	46.2	46.1	27.0
1 l * 高校までの勉強が足りなかった	39.8	45.0	41.3	29.6
1 p 専門分野についての素養が身についた	38.5	33.8	39.1	44.4
1 q 卒業して自信を持って社会に出ていける	36.8	20.1	37.0	61.1
1 r 大学で学んだことは多かった	60.6	37.5	69.6	79.6
1 s 大学生活で自分の独善性に気が付いた	39.2	29.1	34.4	62.3

1 t	大学4年間で自分の成長を感じた	67.5	50.0	72.6	85.2
1 u	大学生生活で教養が身についた	58.7	45.0	61.6	74.0
1 v	江戸川大学の卒業生としての誇りを 持っている	47.7	28.8	54.5	64.8
2 g	卒論を書くことで成長した	56.2	43.8	60.9	66.7
2 j	よい友人ができた	86.3	80.1	87.0	94.4
2 k	自己表現の能力が上がった	60.0	47.6	65.6	84.9
2 i	希望した職種に就職できた	33.8	16.3	38.5	51.9
2 n *	就職先にあまり明るい希望を持ってない	21.1	32.1	17.6	11.2
2 v	この大学に入ってよかった	73.7	45.0	67.4	85.2

3. まとめと提言

今回の調査はパイロット・スタディとしての位置付けであったが、卒業生の協力もあって、まずまずのデータが得られたかと思う。以下で内容面の評価を加えることにする。

まず、この調査は質問量や方法の制約はあったものの卒業生の学生生活全般にわたる主観の世界を素描するにはいくらか役だったかと思われる。この結果の評価をもとに改良をくわえ、次年度以降のデータを積み上げることで、学生の質の変化を追跡することができそうである。

回答内容について言えば、全体として比較的大学生生活に対するよい評価が得られたかと思う。もとより学生層は均質ではなく、彼等が複数の有力な価値志向のもとに学生生活を送ったことが、データから読み取れる。例えば2.4.6に見られるように、同じ4年間の生活でも、大学という場を積極的に活用したグループ(道具的価値の追求者)と、そうしなかったグループ(コンサマティブな価値の追求者)では学生生活に対する満足の度合に顕著な差が見られ、進路に対する満足度にもそれが反映していることが分かる。

しかし同時に、2.3以下に見られるように学生生活についての自己評価と成績評価の間には有意な関連は見ることができなかった。成績評価にやや関連しているのは性別と入試種別のみであった。

これらの結果を簡潔に表現するならば、彼等は学生生活を如何にエンジョイしたかに基づいて、学生生活を評価しているのであり、学業達成自体に重きを置いたグループもあれば、それに重きを置かなかったグループもある。だが、両者おしなべて在学時の満足感は比較的高いことが分かる。江戸川大学はそうした学生の「多様なニーズ」に対してまずまずの環境を提供したと言えるのであろう。

この調査の実施に当たっては事務サイドからの応援を得てかなりの回収率を得たのだが、学務データとのマッチングを目的とした「記名」方式には、必ずしも十分に学生の理解を得られなかった。そのため回収したデータの一部の利用は見合わせざるを得なかった。次年度以降の実施ではスタイル等を若干工夫することで、記名回収率を上げる必要がある。

データ処理に当たっては学務データの提供を受けた。そのため学生の成績と主観的な評価の間の関連について、ある程度の知見を得ることができた。ただ、この種のデータの扱いには慎重を要するためあって、データ入力以外の殆どすべての作業が委員の単独の負担となり、折りからの学年初めとも重なったため、結果の報告までに時間を要した。初めての試みのためあって、試行過程に手間取ったためもある。

今後、この種の調査を定例化するためには、ひとつには学務データについてこの種の調査とは独立にデータマイニングを進めておく必要があり、調査データ処理については事務サイド職員の担当を決めての協力が不可欠であることを付言したい。

パイロット・スタディ総括報告書

1. 点検基準とパイロット・スタディ

大学に対するアクレディテーション（信用付与）の基本点は、

1. 教育機関としての設立趣旨・目的が明確か
2. それを達成する能力を備えているか

を問うものとされている。

江戸川大学については1. は必ずしも全部が明文化されている訳ではなく、個別の行動基準としてローカルに設定されているものもある。例えば、情報リテラシー教育の徹底、国際化対応は「江戸川大学社会学部設立趣旨」にも掲げられているが、小人数教育については明文化はされていない。また、なぜそうした行動基準を重視するかについては「高度情報社会のニーズに応えうる優れた人材を送り出すことを目的」とされている。小人数教育については特に説明はされていないが、後発の高等教育機関としての競合優位性の確保といった暗黙の了解があるものと推察される。こうした一般的、かつ流動性のある基準のもとでは委員会としての型どおりの点検活動は難しいため、現状把握を目的としたパイロット・スタディを行うこととした。ひとつは「授業実施についての教員による自己評価」サーベイであり、第二は「卒業時の学生による大学生活に対する自己評価」サーベイである。幸いこれらのサーベイは関係者の協力により、ある程度意味のある現状把握の素材を与えることとなった。個々の結果は個別の報告書に記載したので参照願いたい。こうした手順が本来の意味での自己点検に役立つかどうかについての結論は今の段階では留保せざるを得ないが、本委員会としては、今後のこうした努力の積み重ねが、中・長期見通しでの自己点検活動につながることを願うものである。

2. パイロット・スタディを通じてのいくつかの提言

2.1 教員による自己評価について

初めての試みのため、先行例がなく、いわば手探りで進めたが、授業運営についてのある程度の感触はつかめたかと思う。ただ今後の実施の参考のために、いくつかのポイントを指摘しておきたい。

・網羅性の欠如

回収率は比較的高かったのだが、教員による自発的な協力を頼ったため、網羅性に欠けるうらみがある。

例えば、後期の報告では大規模授業についての教員による評価の低さが目だった。これは従来から指摘されていた点であり、それがデータによって裏づけられたことになる。

しかしながら報告された以外に大規模授業がない訳ではなく、「教員別受講者人数表」によれば、このほか14年度後期には、登録者数490名、455名といった大規模授業が実施されている。しかし、これらについての評価票は提出されていないため、報告書にはそれらのデータは含まれていない。

結局、後期の評価票未提出者は9名、そのうち前後期とも未提出者は6名であった。ごく一部の授業で複数担当による複雑な構成のため、評価が困難なものがあることが分かっているが、それ以外については未提出の理由は不明である。

こうした点はもちろん事前に危惧された点なのだが、教員の自発的な協力を依存する限り本委員会としてはこうした事態を避ける手立てがない。これは自己点検の限界であり、第三者評価の必要性を示唆する点である。

・学務データについてのデータマイニングの必要性

教員の授業運営に関しては学務データベースが対応しており、少なくとも各科目についての成績評価データが存在するはずである。今回の試みではそうしたデータの提供は受けなかったが、別項で述べる学生の行動をコントロールする観点から言えば、特に大規模授業における成績評価の実態把握などは不可欠と考えられる。学務データについては外部者によるアクセスは許されていないであろうから、データ管理部門自体によるデータマイニングとその結果の提供が必要である。この点、今後の自己点検活動の際には関係部門の協力を要請することとなる。

データマイニングの想定されるケースとしては、各科目毎の経年の受講者数と成績評価、曜日・時限配置による受講人数の予測、成績不振や大学への適応度の低い学生の早期発見の可能性等が挙げられる。

- ・報告結果の利用

教員による自己評価の報告結果は本来ならばカリキュラム検討の際のデータとして役立てられることが望ましい。前期報告書は本文のみが印刷配布され、付録部分は関係委員のみに配布されたのだが、少なくとも役職者には付録を含めてデータ全体が提供されることが望ましい。

- ・要望等の受け皿の問題

授業運営上の問題点やサポートを要する点に記述回答を求めたところ、相当数の回答があり、それらは報告書の付録Cとして添付されている。回答内容が個別的なため、あえてまとめなかったのだが、対応を要するものも少なくない。問題はそうした要望等に対する受け皿である。委員会の権能としては、報告書への記載で終わり、問題の解決に進むものではないのだが、評価票への記述によって「発注済み」とする向きの記述が散見される。要望等の公的解決手段については別途明示されることが望ましい。

- ・今後の継続について

教員による自己評価については上記のような種々の問題があるため、とりあえず15年度の継続実施は見送ることとしたい。上記以外の理由としては委員会による単独実施は事務負担が過重なことも挙げられる。今後新カリキュラム実施2年目ぐらいにカリキュラムの定着度を確認する意味での実施は必要かも知れない。ともあれ今回のパイロット・スタディは教員による協力が何をもたらすかを示したことにはなる。

2.2 卒業時学生に対するサーベイについて

当初このサーベイの実施については事務方から慎重論が出されたが、実際には予想よりはスムーズに実行できた。ただし、卒業学生に対する趣旨徹底が十分でなかったこともあり無記名回答が予想より多かった、今後の継続実施等のために、いくつかのポイントを挙げておきたい。

- ・設問項目とデータの質を向上させ、継続的に実施

設問項目のうち46の評定項目への回答は学生の傾向をそれなりに示しているのだが、バランス、順序効果などを含めて今後も検討が必要である。但し、時系列として扱うには頻繁な入れ替えは好ましくない。後半の自由記述回答は概観したところ、内容が希薄である。必要なものに絞ってプリコード化する必要がある。

- ・点検基準によって、結果の扱いは変わる

このサーベイでは全体の傾向が把握できたほか、学生の行動パターンが2極化していること、また一部に著しい緊張感の欠如があることも明らかになった。だがこの点検結果をどのように生かすかについては、やや検討が必要である。ここでも点検基準との関係をもう少しはっきりさせる必要がある。一般論としては「在学中の学生の満足度を上げる」ことは当面の目標とはなるが、在学時の満足度を犠牲にしても卒業後の長期的な満足度を上げるためには、何を必要とするのかについて、教員側の考え方をはっきりさせる必要もある。

- ・学務データのマイニングの必要性

このサーベイでは学務データの提供を受け、分析のための素材に含めることができた。手間はかかったが、単なるアンケート分析からは得られない知見も得られたかと思われる。継続実施の際は同様のやり方がとれることが望ましい。

- ・結果報告の配布、比較

学生委員会、学友会などにも結果は知らせる必要がある。毎年実施で傾向を見られる可能性があるほか、他大学での実施の機会があれば江戸川大学卒業生の相対的な位置付けもできるかと思われる。

江戸川大学・江戸川短期大学学报 Vol.2 No.5 (通巻11号)
平成15年7月1日発行(増刊号)

編集 江戸川大学・江戸川短期大学事務局企画課
発行 〒270-0198 千葉県流山市駒木474
TEL04-7152-0661